

# 浜田城跡（庭園跡の調査 2）

立正佼成会浜田教会新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2007年 10月

島根県 浜田市教育委員会



明治40年の御便殿（浜田市立浜田図書館所蔵）



昭和40年頃の池（浜田教会躍進の十五年より転載）



T10 杭列



T11 杭列

## 序

浜田市では明治40年に東宮殿下（大正天皇）の山陰行啓に伴い建設された御便殿の建物と土地を立正佼成会から寄贈いただき、その場所に建物を曳き移転し保存活用を図ることとなりました。

御便殿と浜田城山の間にあるグランドは、明治時代に掬翠池と呼ばれた池と島が埋め立てられたもので、元々は浜田城の庭園でした。浜田市教育委員会では浜田城跡の周辺施設の解説も重要と位置づけ、平成12年度にグランド全体の確認調査、平成18年度に御便殿の曳き移転先の発掘調査を実施してきました。

本書は立正佼成会浜田教会の新築工事に伴うもので、江戸時代から昭和40年頃に埋められた池の端にあたる杭列を複数確認し、護岸が修築されながら維持管理されていたことが判りました。これまでの調査結果と併せて、庭園の池と島の形を具体的に復元することができました。江戸時代の陶磁器や浜田城と同種の黒瓦も出土しました。また、浜田城築城以前の古墳時代から鎌倉時代頃の遺物も出土し、浜田市街地の歴史を知る上で重要な調査となりました。

現在は、曳き移転した御便殿と新しい立正佼成会浜田教会があり、池と島があった当時の様相をうかがう事はできません。本書はこの調査結果を末長く後世に伝え、地域史研究への一助となるようにまとめたものです。浜田市街地の変遷を記録した一資料として、学校教育や生涯学習など幅広く活用されることを願っております。

おわりに、あらゆる面から調査にご協力いただきました立正佼成会と地元の方々に対し深甚なる謝意を表する次第であります。

平成19年 10月

浜田市教育委員会

教育長 山 田 洋 夫

## 例　　言

1. 本書は浜田市教育委員会が、立正佼成会浜田教会新築工事に伴い実施した浜田城庭園跡の発掘調査報告書である。平成18年度に現地調査、平成19年度に遺物整理と報告書作成を実施した。

2. 調査は以下の組織で行った。

　調査主体　浜田市教育委員会教育長　山田洋夫

　調査指導　中村唯史（島根県立三瓶自然館）

　島根県教育委員会　文化財課

　調査員　柳原博英（浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係 主任主事）

　事務局　浜田市教育委員会 文化振興課 文化財係

　文化振興課長　山根　穏　文化財係長　原　裕司

　主任主事　瀧山恵子・主事　近重智美（平成18年度）

　主事　宮脇　聖（平成19年度）

3. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は次のとおりである。

　調査協力　浜田市立浜田図書館

　調査参加　岩本秀雄、佐々木五郎、佐々木定実、坪倉ひとみ、中田洋子、中田貴子、半場利定、平野夕子、村上美佐子、百合川幸、吉賀久雄、吉田安男

4. 基準点は平成12年度に浜田城測量調査に伴い設置したものを使用し、平成18年度に以前のデータを基に世界測地系の変換と標高の修正を行った。挿図の方針は磁北で示している。業務は株式会社ワールドが実施した。

5. 附属CDには本文（PDF形式）、遺物観察表（XLS形式）、調査・遺物写真（JPEG形式）を収録している。

6. 出土遺物、実測図及び写真は浜田市教育委員会に保管してある。

7. 本書の執筆編集は柳原が行った。ただし、第4章は文化財調査コンサルタント株式会社渡辺正巳・古野毅がまとめたものを柳原が一部調整した。

## 本　文　目　次

第1章 経過	1
第2章 遺跡の位置と概要	1
第3章 調査の方法と成果	4
第1節 調査の方法	4
第2節 調査区の概要	4
第3節 遺物	13
第4章 浜田城庭園跡発掘調査における杭材の樹種同定及びAMS年代測定	20
第5章 総括	24

## 第1章 経過

明治40年に大正天皇（皇太子時代・東宮殿下）の行啓の際に造られた御便殿（立正佼成会浜田教会）の保存活用と立正佼成会浜田教会の新築工事の具体化に伴い、新しく教会道場が建設される部分の発掘調査を実施することとなった。調査は平成18年5月15日から7月3日まで実施した。このグランドは昭和40年頃まで池と中島があった場所で、近世の絵図に描かれた浜田城の庭園跡にあたる。

これまで、平成12年度にグランド全体の確認調査、平成18年度に御便殿の曳き移転先の発掘調査と調査報告書作成を実施している（浜田市教育委員会2007a）。

### 調査日程

平成18年5月15日 T10・T11 調査開始

6月23日 中村先生調査指導

6月23日 県教委調査指導

7月3日 現地調査終了

平成19年7月6日～10月31日

遺物整理・調査報告書作成

## 第2章 遺跡の位置と概要

現在の浜田市街地では明確な縄文・弥生時代の遺跡は確認されていないが、浜田城跡で磨製石斧が2点表記されている（浜田市教育委員会2007a）。古墳は夕日ヶ丘古墳（殿町）、社家地古墳群（相生町）が確認されている。夕日ヶ丘古墳は浜田城山の南西側にあったとされるが、現在は消滅しており石組があつたといわれる。社家地古墳群は現在、横穴式石室らしき石組が残る。付近から須恵器（杯・甕・ハソウ・高杯など）が見つかっており、社家地八幡宮に保管されている（浜田市役所1950・川原1970）。

古代から中世にかけては那賀郡小石見郷と記されている。中世の山城としては三重城があり、郭と堀切が確認されている。浜田城跡に、一部中世城郭の痕跡を認める説もある（島根県教育委員会1997）。また、中世後期には現在の浜田は既に港湾都市として発展していたと考えられている（井上2001）。

浜田城は元和5年（1619）に古田大膳大夫重治が松坂から浜田に国替になり、益田・三隅・周布などを検分し、現在の場所に築かれた。元和9年（1623）には城と城下の諸工事を完了したと伝えられている。

本丸には高さ約14mの三重櫓（天守）があり、城内にはこの外に櫓はなかった。二ノ丸には櫓台、塩硝蔵、本丸常番所、時打番所、三ノ丸には諸役所、土蔵、表屋敷、南屋敷などがあった。城門は一ノ門、二ノ門、中ノ門、大手門などがあり、二ノ門、中ノ門は多門造りで他は冠木門であった。さらに夕日ヶ丘の西側には庭園、茶屋等が設けられていた（浜田市教育委員会2002・2005）。

浜田藩は古田家2代30年・松平周防守家5代111年・本多中務家3代11年・松平周防守家4代68年・松平右近将監家4代31年と続く。慶応2年（1866）の第二次長州戦争の際に城と城下が焼かれた。しかしすべて焼失はせず、天守などは残っていたと考えられている。

本報告の調査地（浜田城庭園跡）は現在の浜田城山の南側、浜田川の河口から約500m遡った東岸に位置する。現状は埋め立てられて平坦になり、北側に曳き移転により保存された御便殿、南側に立正佼成会浜田教会がある。これまでの調査結果は既に報告書が刊行されている（浜田市教育委員会2007a）。

この場所は明治40年に大正天皇（皇太子時代・東宮殿下）の行啓の際に造られた「御便殿」と「掬翠池」があった場所である。昭和40年代までは池と中島があつたとされている。明治11年11月発行の「浜田市街地之圖」・昭和7年8月発行の「浜田町全図」では島と西側がつながっており、橋がかかっていたと考えられる。昭和34年の地図には池と大小2つの島が確認でき、昭和43年の地図では埋め立てられている。聞き取り調査で昭和40年頃の国道9号線工事の際、現在の商工会議所・城山へ昇る車道あたりの山を削った土で埋め立てたとのことである。

調査地の小字は「古城山」で、近代に浜田城山を含む一帯に付けられた字である。

池と中島は江戸時代の絵図にも描かれており、「浜田城下町絵図」（浅野氏寄贈品）、「石州浜田城」（中根氏蔵）には比較的詳細に描かれており、池と島が近世



平成11年発行・番号は表1に対応



第1図 遺跡周辺図 (S=1/25,000)

明治34年発行・番号は表1に対応

番号	遺跡名	所在	種別	概要
1	浜田城跡（庭園跡）	殿町 古城山	城跡	近世～昭和40年頃、発掘調査実施
2	浜田城跡	殿町 古城山	城跡	元和9年（1623）～慶応2年（1866）、平山城、黒瓦、須恵器、磨製石斧、亀山城、県指定史跡
3	夕日ヶ丘古墳	殿町 夕日ヶ丘	古墳？	石組、消滅
4	動木窯跡	港町 動木	窯跡 (陶器・石見焼)	江戸末～、窯跡3基
5	三重城跡	紺屋	山城跡	郭、堀切
6	日和山方角石	外ノ浦	その他（石碑）	天保5年建立
7	皿山窯跡	外ノ浦	窯跡？	文化年間創業？、丸物、茶器、雑器
8	富島窯跡	浅井	窯跡？（瓦）	伝 浜田城瓦窯
9	社家地古墳群	相生 社家地	古墳	横穴式石室・須恵器

表1 周辺の遺跡概要



作業状況

に遡る事は明らかである。

「浜田城下町絵図」は後期松平周防守家時代（1769～1836）のもので、中島の大きい島には2棟の建物があり、北側と西側に橋が掛けている。小さい島には東側より橋が掛けられており、小型の建物が描かれている。池の南側には「茶屋」と記されている。浜田川との合流部には「船入」とかかれ、柵が描かれている。

「石州浜田城」は本多忠昌大輔家時代（1759～1769）の様子を後（1769～1829）に記したものである。「中嶋」と記され、東側より橋が掛けている。川との合流部に「船入」とかかれ、池のくびれ部には「水門」が描かれている。

天保年間の「浜田表勤向役人衆江文通扣」（堀家文書）には茶屋で御目見えし、中島で饗宴が行われた様子が記されている。

また、慶応2年（1866）の第二次長州戦争の際に藩主たちは「御庭水門」より小舟に乗り、城を脱出してい（浜田市1973）。

### 第3章 調査の方法と成果

#### 第1節 調査の方法

これまでの調査では昭和34年の地図を元に池と島の輪郭が確認できるように調査区を設定している（第3図）。今回も建物建設予定地内で、中島と池の端が当たると想定される部分に調査区を設定して調査を実施したが、当初よりかなり南東側にずれた位置で池の端にあたる護岸が確認され、中島の端は調査予定地内で確認できなかった。このため、調査区の形を変更し、池端の護岸部分を重点的に調査した。池の底は調査区が予想以上に狭隘で、充分な深堀は行えなかった。周辺の試掘調査で池の底の状況は確認している（浜田市教育委員会2007a）。

埋め立てた造成土を重機で掘削し、当時の池の底辺あたりから人力で精査を行った。調査区番号は平成12年度以降の番号を統けて使用し、T10（66m<sup>2</sup>）・T11（100m<sup>2</sup>）とした。その後、工事中の立会によりT10の杭列の続きを一部確認している。

遺物は大半が重機掘削時に見つかったもので、人力

の調査に比べて十分に遺物が採取できなかった。造成土にも浜田城築城以前の古い時代の遺物が含まれていた。

#### 第2節 調査区の概要（第2～5図）

##### T10（第4図）

土層は現地表の下約1.6～2mまでは昭和40年代頃の池埋立の造成土があり、その下に杭列が確認された。基本的に杭列の北側が池の中、南側が地表にあたる。

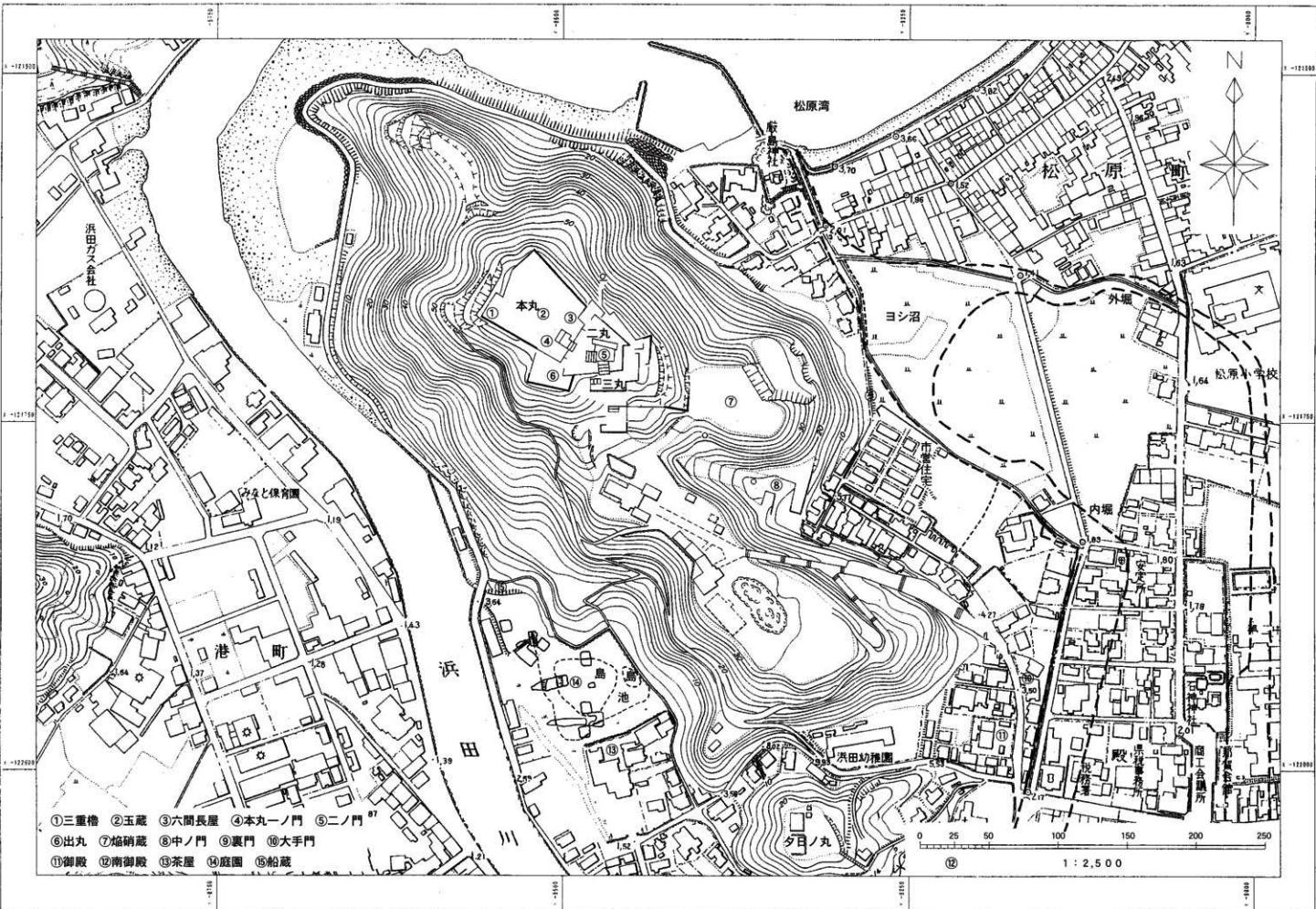
杭列は、数列並行に打たれており、おそらく杭列と石組・盛土による護岸が長期間修築されながら存在したと考えられる。さらに石組の下からも、やや間隔を開けた杭列と石が確認され、岸側に古い時期の杭と石を用いた護岸が造られていたことが判明した。

杭列は検出レベルの高さで大きく3段階（上・中・下）に分けられ、背面の石・盛土と併せて護岸が造られている。杭の直径による分類は第3節の遺物でも述べるが、大型（8cm以上）、中型（6～8cm前後）、小型（6cm未満）に分けている。杭は大半が自然木（針葉樹・マツ・スギ）の先端のみを尖らせている。最も高い杭は直径6.7cm・長さ171.5cm、低い杭列は直径3.6～11.7cm・長さ67～131cmである。石下で検出した下層護岸と想定される杭（広葉樹・クリ）は半裁や板状に加工しており、幅9.4cm・厚さ4.2～6.6cm・長さ83～100cm程度である。

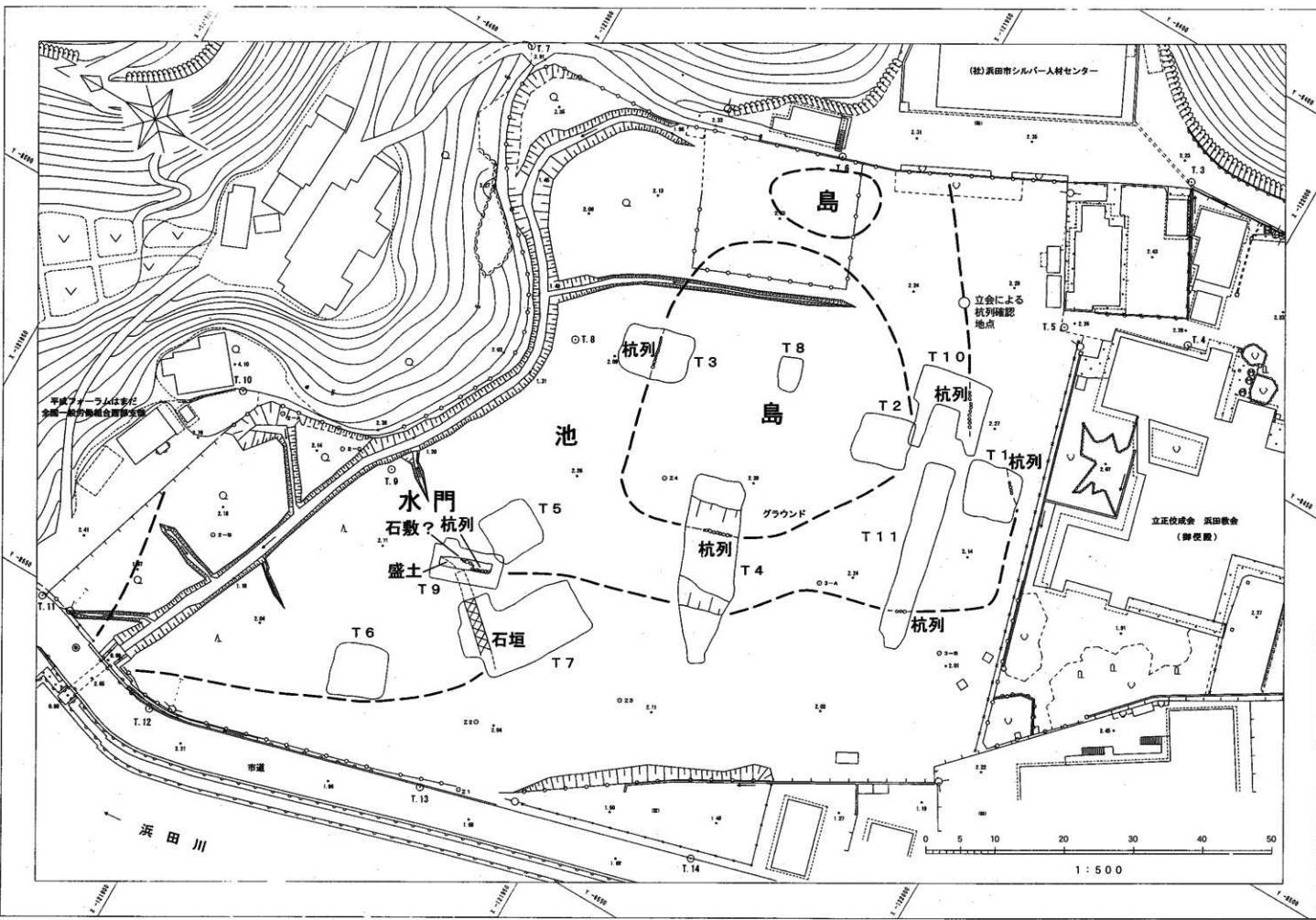
上層護岸（杭の頭の標高約0.3m・杭数59本）は杭列背面に谷積み状に大石を並べ、横倒しの大杭・黒瓦・赤瓦・石見焼などを含む緑灰色系の粘質土を裏込めとし、大規模な護岸工事（第4図・第6～9層）を行っていた。杭列の北側には厚さ10cm程の黒色泥層（第4図・第3層・標高0.25～-0.3m）があり、ビニールやプラスチックを含む。杭列の南側は旧表土のような黒褐色土（第4図・第6層）が確認され、埋め立てられた昭和40年代までの地表にあたると考えられる。

中層護岸（杭の頭の標高約-0.4m・杭数85本）は上と下の護岸で搅乱されており杭列以外は判然としないが、おそらく中位の杭列と背面の石から造られていたと考えられる。

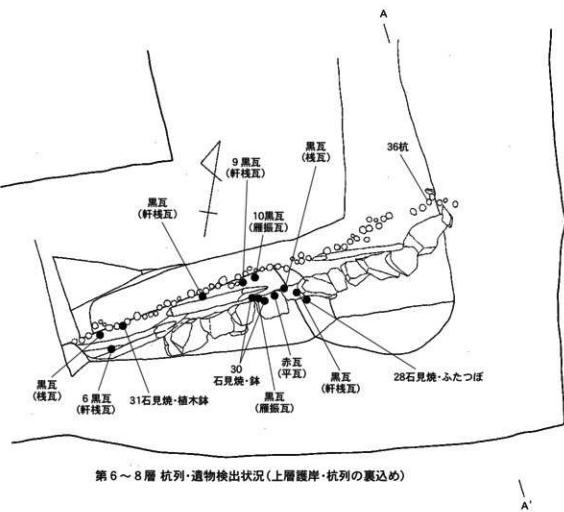
上層～中層護岸の裏込石を除去すると大石の下にやや小ぶりな石が多く見つかり、低い杭列も確認され



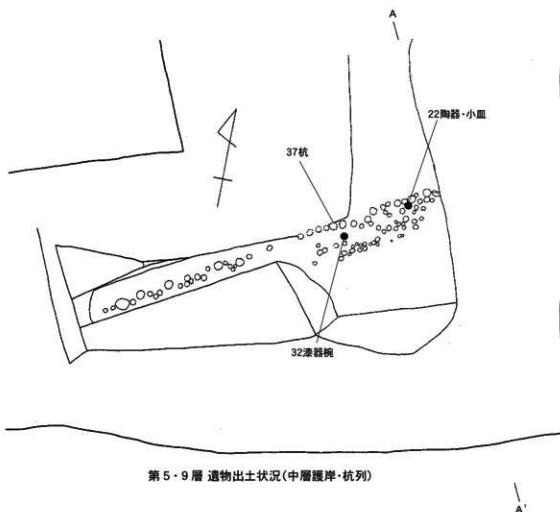
第2図 浜田城跡位置図（地図は昭和31年のもの）



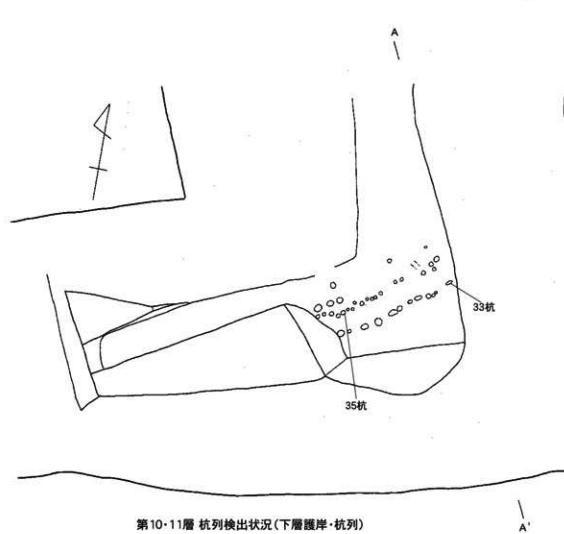
第3図 調査区設定図



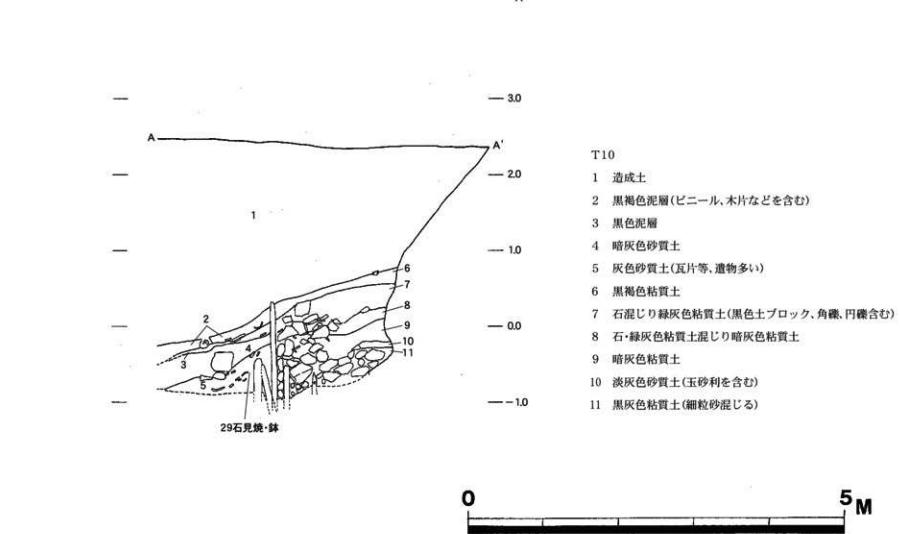
### 第6～8層 杭列・遺物検出状況(上層護岸・杭列の裏込め)



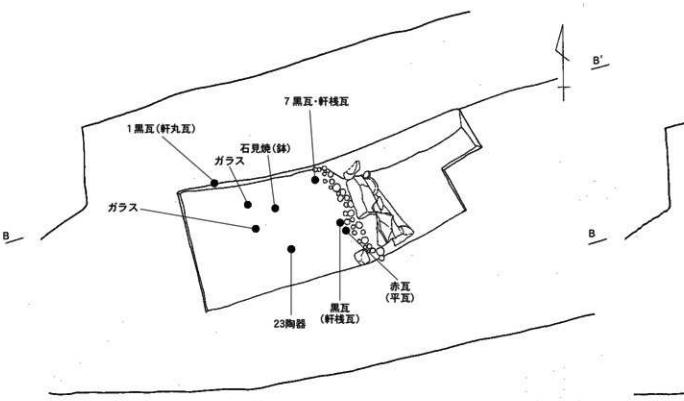
### 第5・9層 遺物出土状況(中層護岸・杭列)



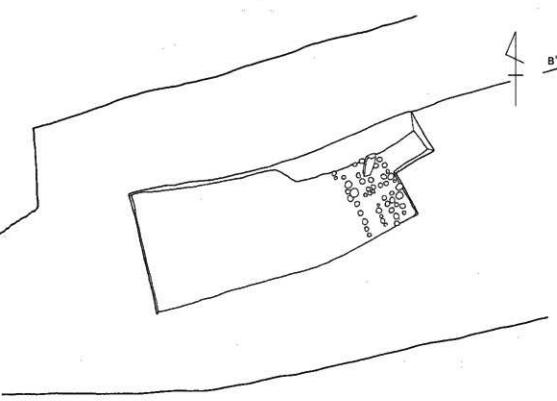
#### 第10・11層 桁列検出状況(下層護岸・杭列)



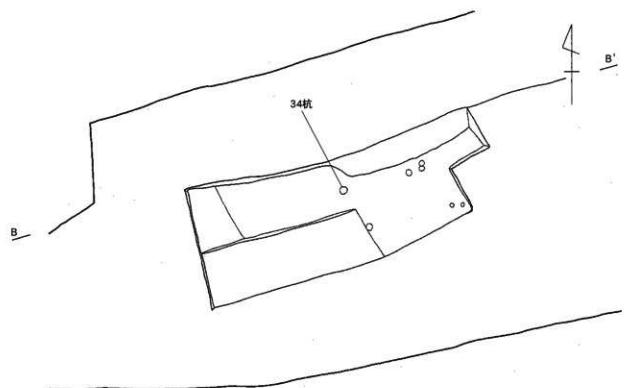
第4図 T10実測図



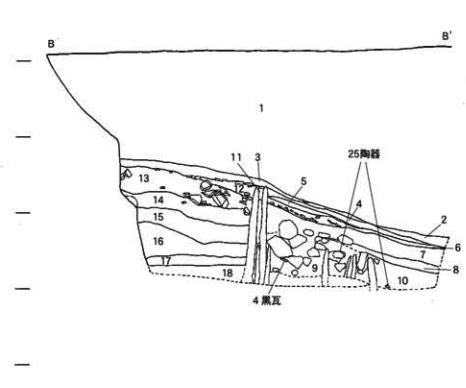
第12・13層 桁列・遺物検出状況(上層護岸・杭列の裏込め)



第9・10層 上位杭列検出状況(中層護岸・杭列)



第9・10層 下位杭列検出状況(下層護岸・杭列)



第5図 T11実測図

た。これが下層護岸（第4図・第10・11層）にあたる。杭の頭の標高は約-0.6mで杭数は39本である。しかし、石は検出直後に湧水で流出してしまい、調査が充分に行えなかった。

#### T11（第5図）

現地表の下約1.4~2.5mまでは昭和40年代頃の池の埋立の造成土があり、その下に杭列が確認された。

杭列から西側が地表、東側が池と考えられる。池側では造成土の最下、池底の直上で黒瓦を多量に含む緑灰色粘土があり、当初御便殿に葺かれていた黒瓦を昭和40年頃の埋立前にまとめて廃棄したと考えられる。この黒瓦は第3節の遺物でも述べるが、光沢があり表面が銀化した硬質のものである。現在の御便殿は昭和38年に三州瓦（赤瓦）に葺き替えられている。

土層は基本的にT10と同様である。杭列の東側には厚さ10cm程の黒色泥層（第5図・第4~6層・標高0.3~0.4m）があり、ビニールやプラスチックを含む。杭列を一部覆うように主に地表側に黒褐色泥層が確認され、おそらく昭和40年代までの池の護岸部にあたると考えられる。しかし、T10ほど、杭を境に土層が明確に異なる状況ではなく、おそらく池が埋め立てられる直前には杭はほとんど見えず、岸側も時折水に浸り、池と岸の境界ははっきりしていなかったと考えられる。

T10と同様に、杭列は数列並行に打たれており、おそらく杭列と石組・盛土による護岸が長期間修築されながら存在したと考えられる。ただし、T10と異なり、上層護岸は中層護岸より岸側に造り、上層杭列の前に大石や横杭を埋めている。このため、中層と下層護岸は杭列以外が上層護岸で搅乱されており判然としない。

杭列は検出レベルの高さで大きく3段階（上・中・下）に分けられるが、下層は杭列が數本見つかっただけで、遺構面としては判然としない。杭の直径による分類は第3節でも述べるが、大型（8cm以上）、中型（6~8cm前後）、小型（6cm未満）に分けている。基本的にT10と同様の傾向が見られる。

上層護岸（杭の頭の標高約0.4m・杭数32本）は杭

列背面に石や黒瓦（近世末～明治40年頃）・ガラスなどを含む黒灰色系粘質土と緑灰色系の粘質土を盛り、杭列の前方には横倒しの大杭・大石を置いていた。標高-0.7m以下には黒色粘土と貝の混じる灰色細粒砂が堆積している。以前の調査結果から見ると、庭園が形成される以前の旧堆積土と考えられる。黒色粘土は上層杭列より池側では確認できず、護岸工事で搅乱されているのである。中層杭列より池側にも灰色砂質土が堆積しており、灰色細粒砂の二次堆積と考えられる。

大石より池側には、やや小ぶりな石が多くあり、下から上層杭列（杭の頭の標高約-0.3m・杭数48本）が確認された。この杭列は数列ほぼ護岸に沿って打たれており、おそらく低い杭列と小ぶりな石による護岸が存在したと考えられる。しかし、T10とやや状況が異なり、石は杭列の上から多く見つかっている。新しい護岸工事で搅乱されたか、杭列の上に石を置いて護岸にしたと考えられる。

なお、さらに下には間隔を空けた低い杭列が確認され、やや岸側にも護岸が造られていた可能性がある。

#### 第3節 遺物（第6図～第9図）

遺物は杭列周辺や護岸の裏込土から黒瓦が多く見つかっている。黒瓦は光沢があまりない厚手の瓦・有段式丸瓦（浜田城表採品と同種・近世末頃か）と光沢のある硬質な棟瓦（御便殿の瓦・明治40年頃）に分けられる。池を埋め立てた造成土には須恵器（古墳時代・土師器と貿易陶磁器（中世）が含まれている。造成土は国道9号線工事の際に浜田城山を削った土と言われており、周辺にさらに古い遺跡が存在した可能性がある。

（第6図・1~5・第7図・6~9・第8図・10、11）は黒瓦である。ほとんどが表面に炭素を吸着させた黒瓦（いぶし瓦）で、褐色釉がかかる赤瓦（石州瓦）はT10の護岸裏込めや池の埋土から少量出土した。黒瓦は胎土が白色系で表面の炭素吸着にむらがある軟質のもの（2・4・5）と、胎土が灰色系で光沢があり表面が銀化した硬質のもの（6~9）に分けられる。しかし（1・3）のような中間的な様相のものもある。

(10~11)は表面が風化しており、色調から分類は困難だが、胎土などからいずれも後者の可能性がある。

(第6図・1~3)は軒瓦で、(1)は軒丸瓦、(3)は軒棟瓦である。(1)は右巻き巴文と珠文が5つ残り、外区の幅は2cmである。表面の炭素吸着にむらがめだつ。(2)は唐草と枝葉が見えるが、中心飾は不明である。表面は炭素がかなり落ちており灰色に近い。(3)は小丸瓦当部が欠けている。上下方向に巻く唐草と枝葉が見える。中心飾りは葉の一部が残る。(4)は棟瓦で表面の炭素が落ちている場所が多い。側面は1面取りで一部ナデを施す。凹凸面とともに、端部周辺はナデ調整を行う。(5)は有段式丸瓦で短く先細りの玉縁部がつく。側面、玉縁部先端部は2面取りである。凸面は縱方向のヘラナデ、凹面には平行する横筋が見られ、コビキ法(コビキB)により粘土板を切り出している。また、ゴザ目状の粗い布目痕と吊紐痕が残る。布目痕は一部吊紐痕を境に残っておらず、型筒全面に布が巻かれていた可能性がある。凸面には直径1.9cmの2つの円が刻印されており、同様の刻印は浜田城跡の表採品にも確認できる。

(第7図・6~9)は軒棟瓦である。胎土が灰色系で光沢があり表面が銀化した硬質のものである。全形がわかるものは無かったが、(6・7・9)の破片から、全形が復元できる。左巻きの三巴文の小丸瓦頭部に中心飾りに輪郭だけの宝珠の左右に簡単な唐草文を上下に2単位巻くものである。巴文は頂部がつぶれて平らになり、平瓦部の唐草は断面が三角形状になる。全体に簡素化した傾向が認められる。瓦当面の右上隅は斜めに切り落とされている。凸面の狹端部側には10本のクシ状工具でX印状に線が入り、すべり止めと考えられる。この線は他の破片では11~14本のものが見られた。内外面にはナデが施され、狭端部側に2ヶ所穴が空けられている。御便殿に当初葺かれていたものと考えられ、明治40年頃のものである。(8)は無文のもので表面はより光沢がある。若干後出する可能性がある。

(第8図・10)は雁振瓦で、引掛部は剥離していたが、他の破片を参考に図上で復元している。全面が風化して炭素は色落ちし、淡灰色になる。段部は両方の接合

面に粗い4~5本の条線をいれて重ね、補強粘土を薄く貼り付けてナデを施す。側面は垂直になり凸型の上で調整したことがわかる。引掛部と反対側の凸面にも5mm幅の沈線が入り、瓦の中央には穴が開けられている。(11)は昨年まで御便殿の軒下に置かれていた鬼瓦で、中央に琴柱が彫られている。琴柱は松平右近将監家の家紋で、御便殿に葺くための特注品の可能性がある。裏面は仕上げが雑で粘土にひび割れが多く見られる。

(第9図・12)は須恵器である。天井部にヘラ削りが見られ、古墳時代の蓋の可能性がある。(13)は貿易陶磁器で、中世前期の龍泉窯系青磁碗の体部である。内面に劃花文が見られる。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗I・2類にあたり、大宰府D期(12世紀中頃~後半)のものである(大宰府市教育委員会2000)。(14~17)は土師器の杯・皿である。いずれも淡灰褐色の色調で、(15~17)は底部に回転糸切り痕が残る。(15・16)は焼成がややまく、(14・17)は硬質である。前者は中世、後者は近世の可能性がある。全形のわかる(17)は口径10.6cm・底径6.1cm・器高2.6cmを測る。他にも底部や体部の破片があるが、全形を復元できるものはない。

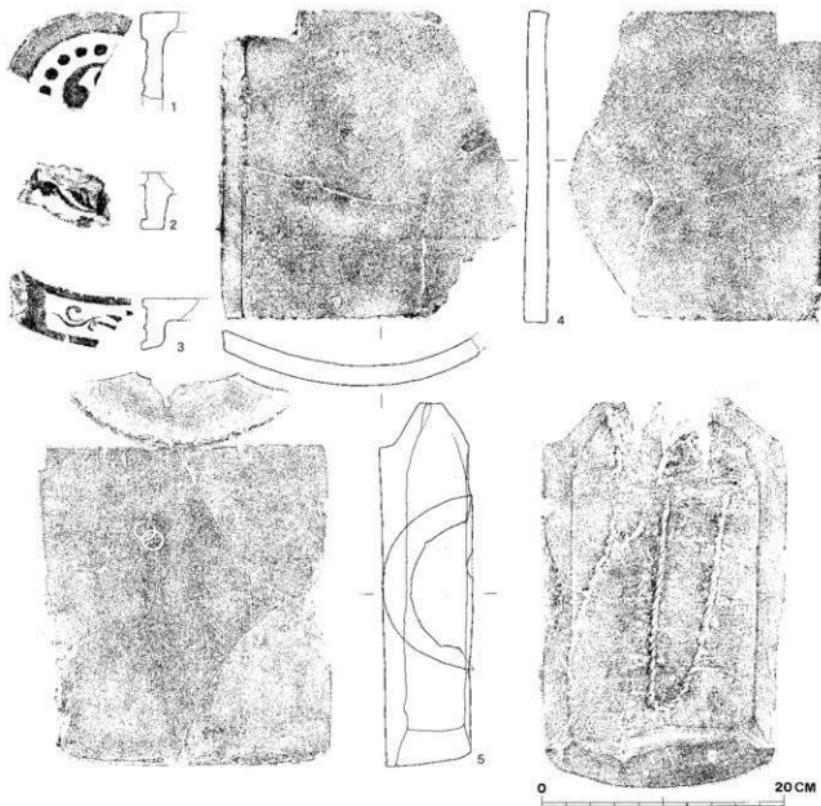
(18~20)は国产磁器である。(18)は青磁の壺か花瓶、(19)は陶胎染付、(20)は青磁皿である。(18)は全体に緑色のガラス質の釉がかかること。(19)は胎土がやや粗い灰色で、淡緑灰色釉にコバルトで模様が描かれる。(20)は内外面に淡緑色の釉がかかり、全体的に光沢がある。高台接地部の釉を削り落としている。

(21~26)は国产の陶器、土器である。(21)は摺鉢の口縁、(22)は小皿、(23)は皿である。(21)は外面につまみ出しとナデに突帯をつくる。内面の下位には摺り目が7本以上見える。(22)は口径8.8cm・底径4.6cm・器高1.95cmを測る。胎土は硬質な暗褐色で、外面の上に赤みを帯びた暗褐色釉がかかること。底部には回転糸切り痕が残る。(23)は外面中位までの内面に褐色の釉がかかること。高台接地部と内面見込みには重ね焼きの痕跡が残る。(24)は大型の皿で高台に1箇所三角の切り込みを入れ、他の接地面は波打つように浅く削っている。内面に白色釉がかかること。内面見込みには重ね

焼きの砂目跡が2ヶ所残る。(25)は鍋類の底部で器壁が薄く底部はやや上昇底氣味になる。外面には一部煤が付着する。(26)は甕の口縁である。玉線状の口縁部を造り、胴部が膨らみだすあたりに低く突帯を造り出す。内外面に暗褐色釉がかかり、外面は一部淡緑灰色に発色する。(27)は焼塩壺の蓋である。土師質で淡赤褐色を呈する。天井は平坦で型作りと考えられる。外面にはハケメ状の平行線が入り、幅広で短い端部がつく。内面は凹凸がある。天井外面に長方形の刻

印があり、生産地銘と思われるが、判読できない。最大径8cm、器高2cmを測る。

(28~31)は近現代の石見焼である。(28)は並軸(透明釉)にコバルトを垂らすつぼの底部、(29・30)は並軸のかかる鉢である。(29)は内面見込みに砂粒、(30)は3箇所以上の目跡が残る。(31)は楕木鉢で、屈折する口縁に直線的な体部を造る。外面と内面上位に濃緑色の釉がかかり、白色釉で外面に連続する楕円、口縁上面に点と線の連続文を粗く描く。



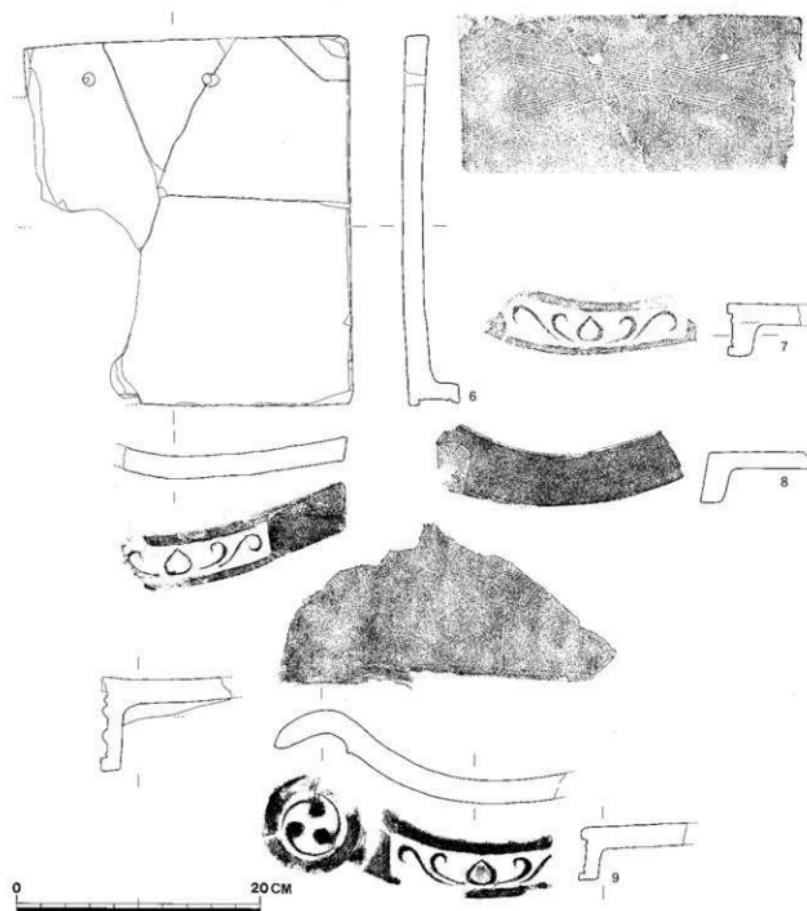
第6図 出土遺物 (1)

(32) は漆器椀である。小型だが厚めの体部にごく低い高台が付くと考えられる。下地に黒漆を全面に塗り、内面のみ赤漆を重ね塗りしている。

(33～37) は杭で池の護岸として打ち込まれていたものである。(33・34) は護岸下位、(35) は護岸中位、(36・37) は護岸上位で検出したものである。樹種は

2点樹種同定を行ったが、ある程度肉眼でも識別できた。(33・34) がクリ、(35～37) がマツと考えられる。

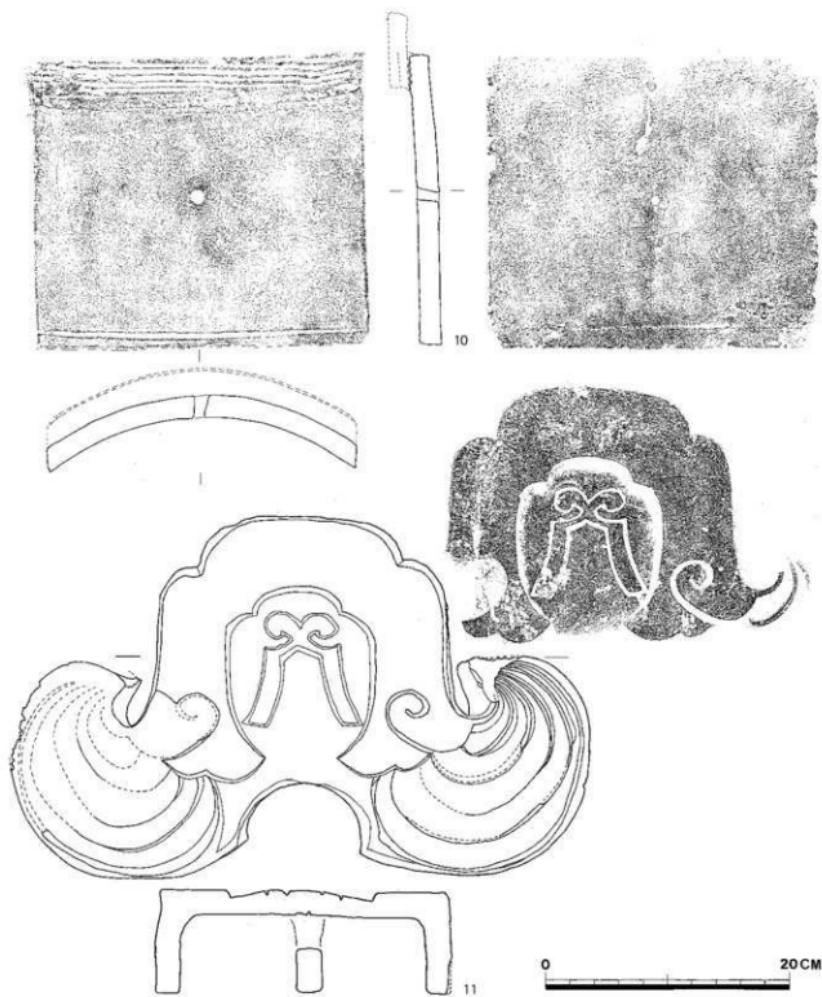
(33) は板材を加工した可能性があるもので、4面が加工しており、先端を尖らせている。長さ77.4cm・幅8.4cm・厚さ2.6cmを測る。(34) は丸材を半裁した可能性があるもので、先端の加工は雑な印象をうける。



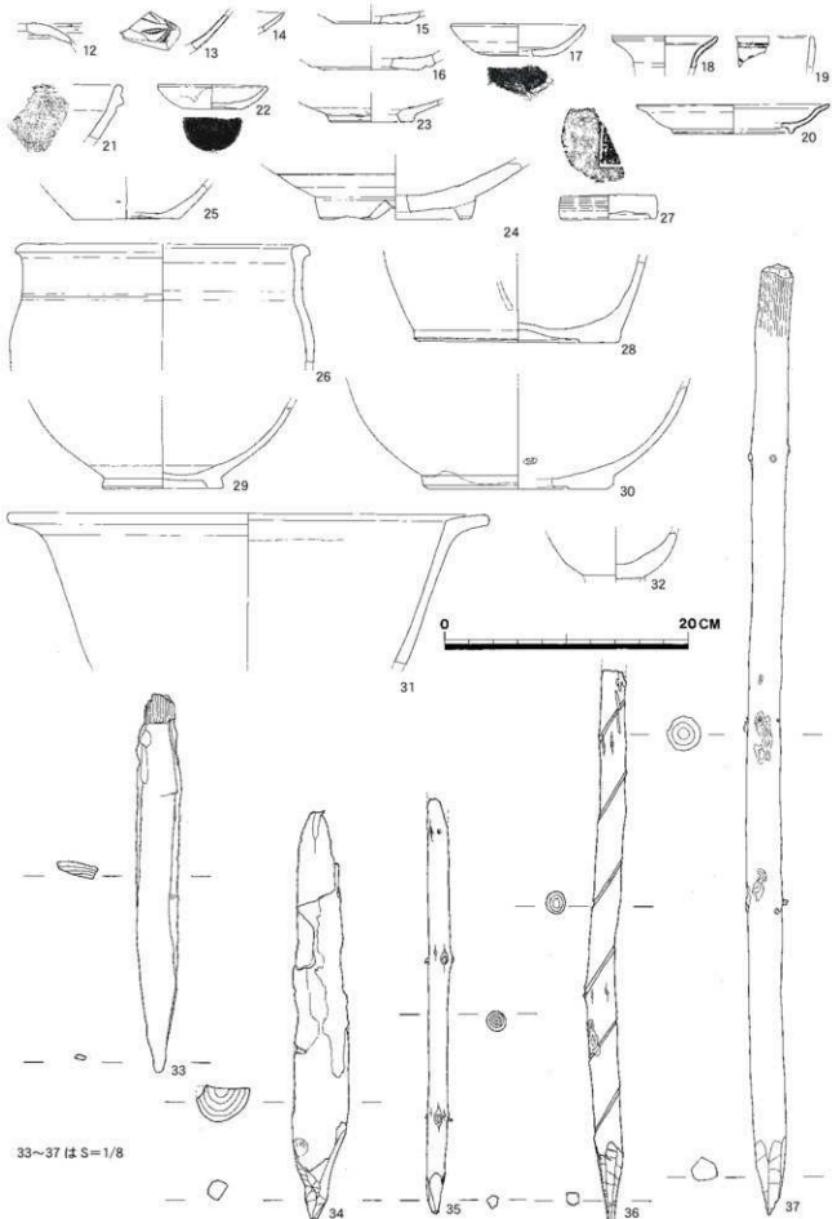
第7図 出土遺物 (2)

外面に円形の焼印のような痕跡が見えるが、不明瞭で判読できない。長さ83.6cm・幅9.6cm・厚さ7cmを測る。(35)はマツの先端を加工したものである。長さ84.6cm・直径4cmを測る。(36)もマツの先端を加工したもの

ので、表面にツルの巻付いた痕跡が残る。長さ112.6cm以上・直径4cmを測る。(37)もマツの先端を加工したもので、長さ195cm以上・直径6.5cmを測る大型の杭である。



第8図 出土遺物 (3)



第9図 出土遺物(4)

杭は直径 3 ~18.5cm のものがあり、検出したもので大型（直径 8 cm 以上～18.5cm・T10 で 47 本、T11 で 64 本）、中型（直径 6 cm 以上～8 cm 未満・T10 で 95 本、T11 で 55 本）、小型（直径 3 cm ～6 cm 未満・T10 で 41 本、T11 で 15 本）になり、中型が最も多い。長さは引き抜いたもので 76～190cm 程のものがあり、枝を落として先端のみを加工したものが多い。樹種は大半がマツで、スギやクリが少量認められた。

## 第4章 浜田城庭園跡発掘調査における杭材の樹種同定及びAMS年代測定

渡辺正巳・古野 穎  
(文化財調査コンサルタント株式会社)

### はじめに

浜田城庭園跡は、島根県浜田市殿町地内に立地する。本報は、浜田城庭園の造成時期及び改修時期を明らかにするための基礎資料とするために行った、杭材の樹種同定及びAMS年代測定調査報告書の概報である。

### 分析試料について

調査区の配置は第2章の第3図（7～8頁）、第1、2図に樹種同定、AMS年代測定を実施した試料（杭）の位置を示す。第2章の第3図中のT10、T11が試料を採取したトレチである。第1、2図に各トレチ試料採取地点近辺の拡大図を示す。「T10杭(e)」、「T10杭17」、「T11杭(古)I」が樹種同定及び年代測定を行った試料である。

### 分析方法

調査事務所にて保管してあった試料（杭）から必要量を分取して、同定・測定用試料を持ち帰った。同定、測定は、以下のように行った。

#### (1) 樹種同定

顕微鏡観察用永久プレラートを、渡辺（2000）に従い作成した。作成した永久プレラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント（株）にて保管管理をしている。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で4倍～600倍の倍率で行った。同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、3断面の顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか（1985）の用語に基本的に従い、記載を行った。

#### (2) AMS年代測定

測定試料から酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去した後、グラファイトに調整し、加速器質量分析計(AMS)を用いて測定を行った。

第1表に測定年代、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正年代、暦年代を示し

た。測定年代は從来実年代とされてきた値で、リビーの半減期(5568年)を用いて算出した値である。 $\delta^{13}\text{C}$ 補正年代は $\delta^{13}\text{C} = -25\text{\%}$ に規格化した $^{14}\text{C}$ 濃度を求め、測定年代を補正・算出したものである。上記の年代は、いずれも西暦1950年からさかのぼった年代値である。暦年代は、暦年代較正データ（INTCAL04）を用いて、OxCal 3.1にて暦年較正を行ったものである。

### 樹種同定結果

分類群ごとに代表的な試料（試料番号に下線）の記載を行い、顕微鏡写真を示した。

(1) マツ属（複維管束亜属）*Pinus* (sub. *Diploxylon*) sp.

試料No. : T10杭17(W06072805)

記載：構成細胞は仮道管、放射仮道管、放射柔細胞、垂直樹脂道及び水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞からなる。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅は広い。放射仮道管には鋸歯状肥厚が認められる。放射組織は單列であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を示す。エピセリウム細胞は薄壁である。垂直樹脂道は主に晩材部に分布し、チロソイドが見られる。分野壁孔は窓状であることなどから、マツ属（複維管束亜属）と同定した。

(2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

試料No. : T10杭e(W06072804); T11杭(古)I(W06072806)

記載：環孔材で径300～350  $\mu\text{m}$ の楕円形の道管が単独で1～2列に配列する。孔圈外では道管径を急激に70～30  $\mu\text{m}$ まで減じ、やや火炎状に配列する。道管せん孔は单せん孔である。また、道管にはチロースが顯著に認められる。孔圈道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は単接線状に配列するのが認められる。放射組織は平伏細胞からなる單列同性型である。以上の組織上の特徴からクリと同定した。

### AMS年代測定結果

測定結果を第1表に示す。2試料の補正年代には中央値でおよそ65年の違いがあり、 $1\sigma$ の範囲では重複することはなかった。しかし、INTCAL04を用いた

曆年較正結果では、2試料の差を明確にすることはできなかった。

#### 庭園造成時期について

浜田城は元和6年（1620）に古田重治により築城された。浜田城庭園は18世紀後半の絵図には描かれており、造成時期はそれ以前であると考えられる（浜田市教育委員会、2007）。したがって庭園内の古い時期の護岸杭と考えられたT11杭(古)1の年代測定値として、300yrBP（1950年を「現在」として、これより何年前という表し方。）あるいは若干古い値が予想された。これに対し得られた年代は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正年代で  $140 \pm 20\text{yrBP}$ （単純に暦に置き換えると、正しい年代が1790～1830年の間にに入る確率がおよそ65%となる。また、「±20」を2倍の「±40」とすることで、およそ65%がおよそ95%の確率に増えた。）と、築城よりおよそ190年（中央値）新しい値であった。一方、新しくと考えられていたT10杭eは $205 \pm 20\text{yrBP}$ （1725～1765年：およそ65%、1705～1785：およそ95%）と、T11杭(古)1に比べ中央値で60年程度古い値を示した。また、これらの値を曆年較正した値は、確率95%の範囲で1650～1960年（T10杭e）、1660～1950年（T11杭(古)1）であった。

以上のことから、杭材は築城後30年以上たってから伐採されたものであることが分かったが、年代を絞り込むことはできなかった。

#### 杭列の時期差について

前述のように、T10杭eとT11杭(古)1の間には、推定と逆の値であったものの、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正年代では有意な差が認められた。しかし、較正年代は重複した値であった。このことから、T10杭eとT11杭(古)1が二時期の杭列であるとの仮説を裏付けるには至らなかつた。

一方、T10杭17はほかの2本の杭に比べ、かなり新しい時期のものと推定されていた。樹種を調べた3本の杭のうち、T10杭17のみ樹種が異なった。このことを用材の時代的な変化に因るとすると、T10杭17がほかの2本の杭と異なる時期の杭である可能性が指摘で

きる。

#### まとめ

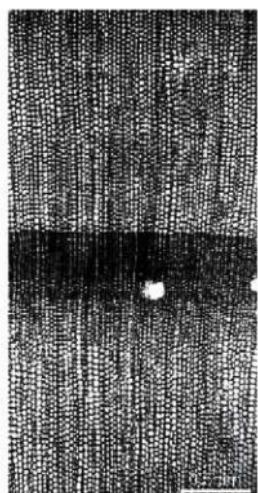
今回の $^{14}\text{C}$ 年代測定及び樹種同定から、以下のことが明らかになった。

- (1) 曆年較正年代から、杭材が築城から30年以上たって伐採されたことが分かった。
- (2) 曆年較正で明確な差が認められなかったことから、T10杭eとT11杭(古)1が二時期の杭列であるとの仮説を裏付けるには至らなかつた。
- (3) T10杭17の樹種がほかの2本の杭の樹種と異なった。このことを、用材の時代的な変化に因るとすると、T10杭17がほかの2本の杭と異なる時期の杭である可能性が指摘できた。

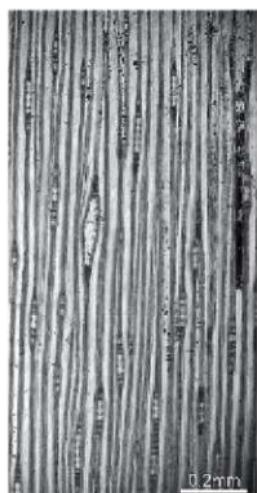
#### 引用文献

- 島地 謙・花伯 浩・原田 浩・塙高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造、276p.、文永堂、東京。  
浜田市教育委員会編（2007）浜田城跡（庭園跡の調査1）御使殿取得活用に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、25p.、6pl.、島根県浜田市教育委員会。  
渡辺正巳（2000）長原遺跡東北地区東調査地出土木質遺物の樹種鑑定、長原遺跡東部地区発掘調査報告書Ⅲ－1997年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書－、247～249、財團法人大阪市文化財協会。

マツ属（複維管束亞属）*Pinus* (sub. *Diploxylon*) sp. 試料No.: T 10杭17(W06072805)



断面図

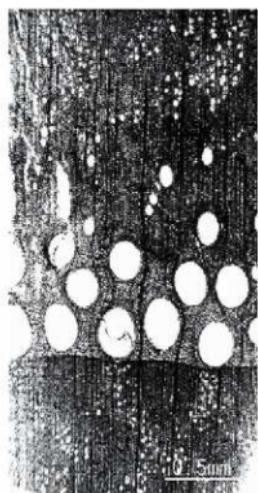


接線断面



放射断面

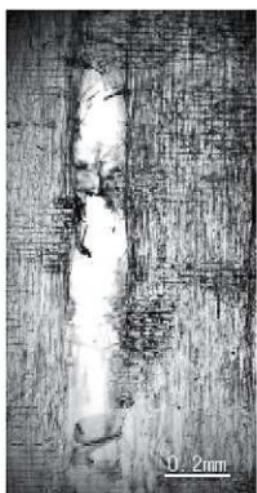
クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 試料No.: T 11杭(古)1(W06072806)



断面図

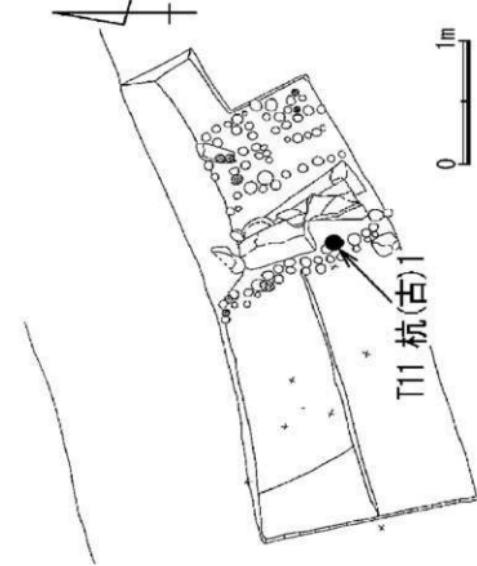


接線断面



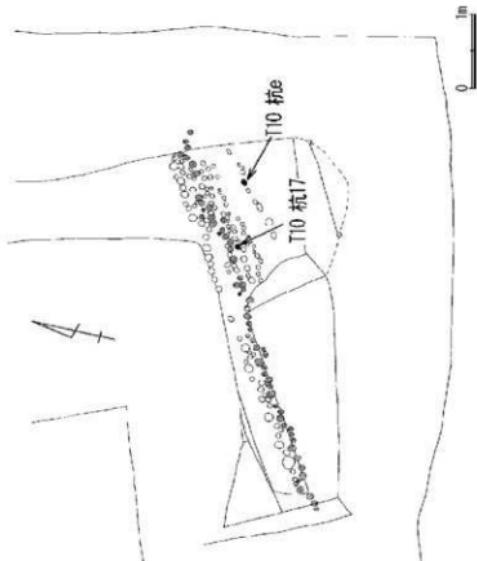
放射断面

第2図 試料採取位置 (T11)



第11表 AMS年代測定結果

No.	試料	状態	測定年代 (yrBP)		補正 <sup>14</sup> C (yrBP)	曆年較正用年代 (yrBP)	曆年代(σ) (cal y.)		曆年代(2σ) (cal y.)	測定番号 (PLD-)
			$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\pm$			(cal y.)	(cal y.)		
T10 柱e	木片 (乾燥重量)	290 ± 20	-30.05 ± 0.3	205 ± 20	203 ± 20	AD1,660–1,680 (18.0%) AD1,760–1,800 (33.6%) AD1,940–1,960 (16.5%)	AD1,650–1,690 (26.0%) AD1,730–1,810 (49.7%) AD1,930–1,960 (16.5%)	AD1,650–1,690 (26.0%) AD1,730–1,810 (49.7%) AD1,930–1,960 (16.5%)	6087	
T11 柱(古)1	木片 (乾燥重量)	180 ± 20	-27.34 ± 0.17	140 ± 20	142 ± 19	AD1,680–1,700 (10.4%) AD1,720–1,770 (21.8%) AD1,800–1,820 (8.2%) AD1,830–1,880 (12.7%) AD1,910–1,950 (15.0%)	AD1,660–1,780 (44.8%) AD1,790–1,890 (33.0%) AD1,910–1,950 (17.7%)	AD1,660–1,780 (44.8%) AD1,790–1,890 (33.0%) AD1,910–1,950 (17.7%)	6088	



第1図 試料採取位置 (T10)

## 第5章 総 括

今回の調査区でも池の岸にあたる護岸の杭列と石組が確認され、池の輪郭がほぼ確認できた。既に池と島など庭園跡全体の様相は報告書（浜田市教育委員会2007a）でまとめている。

調査結果ではT1（平成12年度調査）とT10の杭列は一直線にはならなかった。御使殿側には船着場があるため、池の端はT1とT10の間で屈折している可能性がある。

杭列は検出面で大きく3段階に分けられ、基本的に杭列の背面に石垣が築かれ護岸を造っていたと考えられる。しかし、最も新しい護岸工事（昭和27年頃）が上から大規模に行われているため、古い時期の石組は明確に積上げた状態で確認できなかった。護岸は以下の3時期の変遷が考えられる。

### 下層護岸

最も低い杭列と低い石組が灰色粘質土（池築造以前の土）の上面に築かれる。

→近世の可能性あり

### 中層護岸

上層の杭列に低いレベルで平行する杭列と石組・裏込めの盛土が見られる。杭列が最も多く、石組と併せて何處か改修が行われている。

→明治40年・東宮殿下行啓の際の工事と、その前後の時期か

### 上層護岸

以前の杭列の間に高い杭列を打ち、裏込めとして石組の間に大石・黒瓦（御使殿の瓦か）・杭などを入れ、盛土を行っている。最も大規模な護岸工事である。

→昭和27年頃・個人所有時の改修工事か

古写真でも明治40年頃（巻頭写真上）には池の端に石垣と杭列が一部見えるのに対し、埋立直前の昭和40年頃（巻頭写真下）には杭列しか見えず、石垣は確認できない。杭列と石垣による護岸から杭列と盛土（石・大杭などの裏込め）による護岸へ変わっており、調査結果とおよそ一致している。中層護岸と上層護岸では杭の頭のレベルが80cm近く異なる。杭の腐植や修繕に伴う切断の可能性もあるが、近世に庭園が造ら

れ、明治末期以降に池の埋積が特に進んだため、高いレベルで護岸が造られるであろうか。しかし、中層～低層の杭列はいずれもマイナス標高で検出されており、具体的な江戸時代の庭園の水位と護岸の関係は不明確である。

瓦は遺物の項でも述べたが、黒瓦は胎土が白色系で表面の炭素吸着にむらがある軟質のもの（2・4・5）と、胎土が灰色系で光沢があり表面が銀化した硬質のもの（6～10）に分けられる。しかし中間的なものの（1・3・10）もあり、色調・質感では分けきれない点もある。前者の黒瓦は現在の浜田城山からの表採品に似ており、近世～明治末頃と考えられる。有段式丸瓦と棟瓦が見られ、本瓦葺と棟瓦葺があったことがわかる。これが時期差か葺かれた場所の差を示すかは将来的細分に向けた課題である。浜田城跡でも同様の傾向が見られ、城の各施設には黒瓦が葺かれていたのが判るが、葺き方については不明である。

後者の瓦は明治40年（1907）に建てられた御使殿に当初葺かれていた瓦と考えられ、棟瓦葺のものである。

御使殿は昭和40年に黒瓦から現在の三州瓦に葺き替え、平成2年に棟の瓦だけを石州瓦に替えている。

出土品はほとんどが明治～昭和40年代頃のものとみられ、近世頃の遺物は18世紀頃の陶胎染付（19）、近世末頃の焼塗壺（27）などが少量確認できる。

浜田城築城以前の遺物では、（第9図・12）が古墳時代後期頃の須恵器蓋と考えられる。中世の遺物は（13）が大宰府分類の龍泉窯系青磁碗I-2類（大宰府市教育委員会2000）にあたり、およそ鎌倉時代頃である。他に平安～鎌倉時代頃の土師器片もある。

杭のAMS年代測定・樹種同定の結果（第4章参照）、杭の伐採年代は確実ではないが17世紀後半まで遡る可能性がある。これまでに絵図より18世紀後半頃が確実な上限であったが、約100年遡る可能性も残る。

平成12年度の試掘調査・平成18年4月の御使殿曳き移転予定地の発掘調査に続き、今回の調査で昭和40年代に埋め立てられた浜田城の庭園跡の様相をさらに明らかにできた。確実に近世に遡る遺構は確認できなかつたが、近世末頃の黒瓦が出土し、浜田城跡の表採

品と同様であることがわかった。また、浜田城が築かれる以前の遺物（古墳時代の須恵器・平安～鎌倉時代頃の土器・陶磁器）も出土し、浜田市街地の歴史を知る上で重要な調査結果となった。

今後とも浜田城を含めた周辺の調査を継続し、城山とその周辺地域の保存活用を行っていく必要がある。

#### 本文参考文献

井上寛司2001『中世の港町・浜田』浜田市教育委員会

市本芳三 1995『瓦』中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

江戸遺跡研究会編2001『歴説 江戸考古学研究事典』柏書房  
大橋康二2004『シリーズ「遺跡を学ぶ」』005

世界をリードした磁器窯・肥前窯』新泉社  
川原和人1970『石西の須恵器』

関西近世考古学研究会2003『関西近世考古学研究』X I

九州近世陶磁学会2002『九州陶磁の編年』

島根県教育委員会1997「115 浜田城跡」

『島根県中近世城館分布調査報告書(第1集)石見の城館跡』

大宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡X V－陶磁器「分類編」』

杉本宏2000『棧瓦考』『考古学研究』第46巻第4号 考古学研究会

浜田市1973『浜田市誌』上巻

浜田市教育委員会1993「浜田城跡発掘調査概報」

『龜山』第20号 浜田市文化財愛護会

浜田市教育委員会2002「浜田城跡」『浜田の文化財』

浜田市教育委員会2005『浜田城』パンフレット

浜田市教育委員会2007a『浜田城跡（庭園跡の調査 1）』

浜田市教育委員会2007b『東宮殿下浜田御旅館 御便殿』パンフレット

浜田市役所1950『浜田』

原裕司2001『浜田城調査について－中間報告として－』『シンポジウム 浜田城を語る』浜田市文化財愛護会・山陰中央新報社

平田正典1979『石見粗陶器史考』石見地方史研究会

藤田亭2001『浜田城址公園について』

『文化財愛護会 平成13年4月例会 発表資料』

#### 浜田城関係文献一覧

浜田会1892『濱田城地目録』『濱田会誌 第二號』(1892)・『濱田会誌 第三號』

藤井宗雄1899『濱田郷』安達共榮堂

大島幾太郎1935『濱田町史』一誠社

田村乾一1975『城 石見浜田城』関西城郭研究会

藤岡大拙他編1980『日本城郭体系 第14巻 烏取・島根・山口』

#### 新人物往来社

内藤正中編1983『山陰の城下町』山陰中央新報社

矢守一彦1988『城下町のかたち』筑摩書房

谷口昭1992『転封考 資料編』『名城法學 第一四卷 第三号』名城大学法学会

三浦正幸1992『浜田城』『復元体系 日本の城6 中国』ぎょうせい

岩崎健1998『浜田城』『Nice To Meet You VOL.153』ladics ますだ

三浦正幸1999『城の鑑賞基礎知識』至文道

浜田市教育委員会1999『松平周防守家の成立と浜田』浜田市世界こども美術館

中井均2004『浜田城』『歴史群像シリーズ よみがえる日本の城6』学習研究社

白峰旬2006『天保7年の石見国浜田城引き渡しについて』『別府大学大学院紀要 第8号』別府大学大学院文学研究科



調査前



T 10 全景



T 10 桧列・石組検出状況



T 10 桧列・石組



T 10 桧列（中層）



T 10 桧列（中層）



T 10 桧列（下・中層）



T 10 土層（池～岸側）



T 10 土層（護岸）



T 11 全景



T 11 杭列検出状況



T 11 杭列（上・中層）



T 11 杭列（中層）



T 11 土層（岸側）

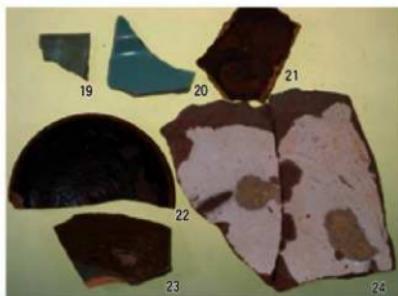


T 11 土層（池側）



御便殿と調査区（城山より）







T 10・11 全景（城山より）



埋戻作業



掘削状況



浜田城下町絵図（浅野家旧蔵）部分



庭園跡全景（平成13年）



庭園跡全景（平成19年）

## 報告書抄録

ふりがな	はまだじょうあと ていえんあとのちょうさ 2							
書名	浜田城跡（庭園跡の調査2）							
副書名	立正佼成会浜田教会新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	柳原 博英							
編集機関	島根県浜田市教育委員会							
所在地	〒697-8501 島根県浜田市殿町1番地 TEL 0855-22-2612 (代)							
発行年月日	2007年10月							
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はまだじょうあと (ていえんあと) 浜田城跡 (庭園跡)	しまねけんはまだし とのまち 島根県浜田市 殿町	32202	L 27	34° 54' 03"	132° 04' 24"	20060515 ~20060703	166m <sup>2</sup>	立正佼成会浜田 教会新築工事に 伴う本発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
浜田城跡 (庭園跡)	城跡	近世～昭和40年頃		石垣・杭列	須恵器・土師器・陶磁器・肥前陶器 ・石見焼・近世瓦・近現代瓦		浜田城の庭園と して、人工の池 と島を造る。	
要約	浜田城山の南西にあった浜田城の庭園跡は、近世から昭和40年頃まで池と島が2つあったが、埋め立てられてグランドになっていた。調査の結果、造成土の下で池の端の杭列が複数確認され、修築を行なながら護岸が維持されていたことが判った。これまでの調査結果と併せ、ほぼ池と島の形を確認することができた。近世末頃の黒瓦や陶磁器類、浜田城築城以前の時代の須恵器や中世の遺物も出土した。							

### 浜田城跡（庭園跡の調査2）

立正佼成会浜田教会新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 島根県浜田市教育委員会 2007年10月

島根県浜田市殿町1番地

印刷 柏村印刷株式会社